

明治末期における中国語教科書仮名表記の考察
—鄭永邦の著書を中心に—
The Research of Kana Phonetic Notation in Chinese Textbooks
at the End of Meiji Era: Focusing on the Tei Eihou's books

孫 雲偉
SUN Yunwei

Abstract

This paper analyses the characteristics of the kana phonetic notation in Tei Eihou's *Peikin Hatsuon Hansetsuhyou* and Tei Eihou and Kure Daigorou's *An English Chinese and Japanese conversation* and *The Japanese Chinese English and Russian conversation*. Tei Eihou's particular system is an important historical data for research of pronunciation and kana on Beijing dialect of Meiji Era, and plays an extremely special role in the history of Chinese education in the Meiji Era.

目次

1. はじめに
2. 『日漢英語言合璧』と『日清英露四語合璧』の先行研究
3. 『日漢英語言合璧』と『日清英露四語合璧』の構成
4. 『日漢英語言合璧』と『日清英露四語合璧』の仮名表記の分析
5. 『北京發音反切表』の仮名表記
6. 明治末期における鄭永邦著書の仮名表記
7. 鄭永邦著書における仮名表記の北京語音声教育史上の価値

1. はじめに

鄭永邦は明治21年(1888)から明治43年(1910)にかけて、仮名表記を付した著書を3種、すなわち『日漢英語言合璧』(1888年 以下は『語言合璧』と略称)、『北京發音反切表』(1904年 以下は『反切表』と略称)、『日清英露四語合璧』(1910年 以下は『四語合璧』と略称)を出版した。最初に北京語の仮名表記を採用した廣部精『亜細亜言語集 支那官話部』(1880年 以下は『言語集』と略称)以降から『語言合璧』(1888)までの間に『英清会話独案内』(1885年 以下は『独案内』と略称)と『英和支那語学自在』(1885年 以下は『自在』と略称)などの仮名表記を付した北京語教科書も出版されたが、本稿では鄭氏編著3書を中心に、その仮名表記を分析すると同時に『言語集』、『独案内』、『自在』の仮名表記と比較検討し、鄭氏の仮名表記¹⁾が明治末期の中国語教科書におけるその位置付けを明らかにしたい。

2. 『日漢英語言合璧』と『日清英露四語合璧』の先行研究

『語言合璧』の先行研究は極めて少なく、主なものは以下の通りである。

吳菲<<日漢英語言合璧>語音教學研究>(2007)は明治時代における日本の北京語の音韻体系及び教育方法を解明するために、『語言合璧』の仮名表記を声母、韻母、声調の三つの方面から分析し、さらに発音表記符号、表記方法について考察した。そして、『語言合璧』の中にある北京語の仮名表記を国際音声記号に転写し、『語言合璧』の仮名表記の正確性を明らかにした。

王雪「明治・大正期における日本人の r 化音の学習」(2017)は『語言合璧』の r 化音(アル化音)に焦点を絞り、明治・大正時代の13点の北京語教科書に記されている r 化音を考察した。その結果、「大部分の日本人の r 化語と r 化音に対する認識における科学性が乏しかった」と述べている。しかし、『語言合璧』については「ほぼ完璧に発音を表しうる仮名表記系統をもち、r 化音と音交替に対する科学的な認識は、当時最高の位置付けがなされる。」(141頁)と評価している。

六角恒広『中国語書誌』(1994)は『語言合璧』の書誌情報や著者鄭永邦、呉大五郎について紹介した上で、出版人鄭永慶は「鄭永寧の長子で永邦の兄である」ことと『官話指南』の編者の一人呉啓太は呉大五郎の兄である」(55頁)ことを指摘した。

『四語合璧』については林暁京《<日清英露四語合璧>的漢語語音詞彙研究》(2014)の論文しかなく、その研究は音韻と語彙の二つの方面から分析した。音韻は声母、韻母、声調から考察し、語音教育上の方法と不十分な点を分析した。語彙は英語、漢語の対訳を中心に、『四語合璧』の語彙、外来語の特徴を考察した。それらの分析により、漢語音韻、語彙の特徴及び日本人の語音に関する教育方法を明らかにした。

3. 『日漢英語合璧』と『日清英露四語合璧』の構成

(1) 『語言合璧』

『語言合璧』は劉慶汾の序²⁾、島田胤則の序、「凡例」、「自序」及び本文の五つの部分から構成され、全195頁である。本文は名詞、短語、会話の3部分に分かれ、それらを日本語、中国語、英語の3言語の対訳形式からなっている。中国語と英語の上に仮名で表記している。出版人は可否茶館の館主鄭永慶である。劉慶汾、島田胤則の序と「自序」は主に成書の背景、執筆目的が記されている。それらの序から、当時は貿易に英語がよく用いられ、著者の鄭氏と呉氏は官吏、商人、庶民が外国語で交流できるように、『語言合璧』を編纂目的としたことがうかがえる。

(2) 『四語合璧』

『四語合璧』は「辯言」、島田胤則の序、「自序」、「凡例」、本文から構成され、全361頁である。表紙には「従六位島田胤則 陸軍大学教授正七位河津敬次郎校閲」と記されている。島田胤則の序、「自序」は『語言合璧』の内容と全く同じものである。「凡例」に『語言合璧』には無かった「開口齒音zi、ci、si」の項目が加えられた。そして、『四語合璧』の本文は句読点が付されている。

『語言合璧』と『四語合璧』の本文の構成や内容はほぼ同じであるが、『四語合璧』はロシア語が加わった。また、『四語合璧』は『語言合璧』の本文の語彙を、全17箇所³⁾について修正した。

(3) 『語言合璧』と『四語合璧』の発音表記

両書の「凡例」ではウェード氏のローマ字表記を引き合いに出して音声を説明しているが、本文にはそれを使わずに、仮名のみを使用した。また、鄭氏は中国語の特殊な発音に対して、仮名以外に「^ˊ」、「^ˋ」、「^ˊ」、「^ˋ」のような符号も採用した。王雪(2017)は『語言合璧』の「凡例」に挙げられた特別な符号について、現代漢語の拼音符号と対比させて、その特徴を解説した。以下は王雪(2017)を参考した上で、両書の「凡例」及び『四語合璧』で増えた項目について説明を加えたい。

- ① 声調の説明。「凡例」では、「漢字ノ四方ニ圈點ヲ施セルハ。即チ四聲ノ別ヲ示スモノナリ。此四聲ハ。北京官話ノ音聲ニシテ。」と記している。また、四声の発音過程を描写している。
- ② 有気・無気の説明。有気音は「漢語字頭ニ一符ヲ施スモノハ。出氣ノ記號トス。」と記されているが、仮名表記の所には表示されていない。
- ③ アル化音の説明。アル化について鄭氏は以下のように例を挙げて説明している。
孩兒二字ノ如キ。其字音ヲ分テバ。(孩兒)トナルモ。言語ノ勢ニ於テハ。(ハル)ト成ル。此他
一點兒ハ(イチ^{イチ} エール)。個個兒ハ(コー^{コー}コール)等。
- ④ 前後鼻音の説明。鄭氏は「漢音ニ寛窄ノ別アリ。我(ヌ)ハ即チ窄音ニシテ。(ン)ハ寛音ナリ。」と記されている。両書では胖(パ^x)以外は全て前鼻音韻尾-nを「ヌ」、後鼻音韻尾-ngを「ン」に対応し

ている。

- ⑤ 符号「[˙]」について。符号「[˙]」は「喉頭音及ビ舌音。唇音ノ喉頭ニ響クモノ」とある。王雪（2017）によると、符号「[˙]」は「舌根音g、k、hが声母である音節に集中的に付けられている。そのほか、一部の主母音がeである音節、韻母がouである音節にも見られる。」（145頁）と述べている。また、墨（[˙]モ）/磨（[˙]モ）、盒（[˙]ホ）/合（[˙]ホ）給（[˙]ケイ）/給（[˙]ケイ）等の表記から見ると、鄭氏が符号「[˙]」の使い方に混乱が見られる。
- ⑥ 符号「[˘]」について。符号「[˘]」は「喉口音⁴⁾ニシテ。」とある、王雪（2017）は「正文では喉口音üがある音節は一律に符号[˘]を書き添えている」（146頁）と指摘している。ところが、本文には繞（[˘]ヤウ）、霜（[˘]ヨワン）熱（[˘]オー）にも符号「[˘]」を用いている。
- ⑦ 符号「[˚]」について。符号「[˚]」は「舌音ニシテ。」とある。王雪（2017）は「声母がd、tで、韻母がi、e、ie、iao、ian、ing、uである音節に使用されている。」（146頁）と指摘している。『語言合璧』と『四語合璧』の本文には共に「都」に「ツ。ー」と表記し、「du」と読むべきである。
- ⑧ 符号「[˘]」について。符号「[˘]」は声母zh、ch、sh、rの音節に使っている。しかし、鎮（チエヌ）、主（チウ）等のような少数の例で「[˘]」がないものも見られ、漏れがある。また、『語言合璧』の「走（[˘]オウ）」と『四語合璧』の「手（[˘]オウ）」は巻舌音の符号「[˘]」と歯茎音の符号「[˘]」が付けられているが、符号の向きが上下逆さまになっている誤植によるものだと判断できる。
- ⑨ 符号「[˘]」について。符号「[˘]」は『四語合璧』のみに見られ、「開口齒音ニシテ。」とある。すなわち、歯茎音zi、ci、siの場合のみ符号「[˘]」を用いる。王雪（2017）は『語言合璧』には子（[˘]）、廁（[˘]）等が見られるが、筆者が調査したところ、王雪氏が指摘した頁にはそれらの表記を確認できず、全文でもその用例がないことがわかった。王雪氏が使用した『語言合璧』は恐らく初版本ではなかった可能性が高い。

以上のことから、鄭氏は正確な北京語を学習できるように、それらの発音の特徴を説明できるため、補助符号を導入した。

4. 『日漢英語合璧』と『日清英語四語合璧』の仮名表記の分析

筆者は両書の仮名表記を整理し、拼音字母と仮名表記の音節対照表を作成した。本節では、声母、韻母、特殊な仮名表記について分析する。

(1) 声母

以下は声母に対応している仮名表記の対照表であり、上述したように仮名だけでない符号も併用している。また、異なる韻母に対応するため同じ声母の発音であっても、複数の仮名表記が現れる。

両書のゼロ声母と歯茎音zi（[˘]）、ci（[˘]／[˘]）、si（[˘]）以外の声母は、全く同じ表記である。声母“b”から“s”はそれぞれ五十音図によりハ行、マ行、タ行などの仮名に対応している。“h”、“r”に対応している仮名はそれぞれハ行、サ行であるが、実際にはカン（虹）、ヤウ（若）の音と対応する場合もある。また、誤用と判断できる表記もある⁵⁾。

(2) 韻母

各韻母に対応している仮名表記を整理し、表2にまとめた。両書の韻母は37個あり、韻母ueng（ウオン）は本文には見られないが、凡例にある為、表に加えた。

韻母の仮名表記には以下の特徴がある。

- ① f、zh、ch、sh、r、z、c以外の声母と綴る際、韻母 a、o、e、i、-i、u、üは長音「ー」で表示している。
- ② 韻母ai、ei、uiは「イ」で、ao、ouは「ウ」で、an、inは「ヌ」で、iongは「ヨン」で、ang、ing、ongは「ン」、ieは「エー」、iaohは「ヤウ」、uangは「ワン」、iangは「ヤン」、uanは「ワヌ」、uengは「ウオン」、erは「エル」で表記する規則がある。

表1 『語言合璧』と『四語合璧』の声母対応仮名表記対照表

声母	仮名表記	声母	仮名表記	声母	仮名表記	声母	仮名表記
b	バ、ビ、ブ、ベ、 ボ、'ボ、パ、ポ、 ペ、'ペ。	p	パ、ピ、ペ、'ポ、 ビ、ホ	m	マ、ミ、ム、メ、 モ、'ム、'メ、'モ、	f	フ
d	タ、テ、ト、 ツ、チ、'ト	t	タ、ト、チ、'ツ、 'ト	n	ナ、ニ、'ノ、ニ	l	ラ、リ、ル、ロ、 リ、'レ、'ロ
g	カ、ク、コ、'ク、 'ケ、'コ	k	カ、ク、コ、'ク、 'コ	h	ハ、ホ、'ヘ、'ホ、 カ		
j	チ、チ	q	チ、チ、カ	x	シ、シ		
zh	チ、'チ、チ、チ	ch	チ、'チ	sh	シ、'シ	r	ジ、'ジ、シ、ヤ
z	ツ、'ツ、'ツ、	c	ツ、'ツ、ス、'ス	s	サ、ス、ソ、'ス、 シ		
ゼロ声母	ア、イ、ウ、エ、イ、'オ、ユ、ヤ、ユ、ヨ、ワ						

表2 『語言合璧』と『四語合璧』の韻母対応仮名表記対照表

韻母	a, o, e, i, -i, u, ü			ai, ei, ui			
仮名表記	ヤー、アー、オー、ウー、ワー、ワ、 ユー、'オー、イー、イー			イ、ヤイ、ヤイ、ウイ、ユイ、エイ、アイ、ウオイ、 ウエイ、ウライ			
韻母	ao, ou, uan, iao	an, in	er	uo	ia	ie, üe	iu
仮名表記	ウ、ヤウ、 アウ、'オウ、 ヨウ	ヌ、ヤヌ、 アヌ、ワヌ、 イヌ	エル	オー、オラ、 ラー、ウオー	ヤー、アー、 ヤ	エー、エ、 イエー、 ユエ	ユウ、ユー
韻母	ua, uai	uan		ueng	uang		
仮名表記	ワー、ワイ	ワヌ、ヨワヌ、オワヌ		ウオン	ワン、ヨワン		
韻母	ang, eng, ing, ong, iong, iang			en, un, ün, ian, üan			
仮名表記	ン、ヤン、エン、アン、オン、ヨン、 オン、イン			エヌ、ヌ、ウエヌ、ユエヌ、イエヌ、ユエヌ、イヌ			

- ③ 文末に使用している疑問詞や感嘆詞としての「呢、呀、罷、阿、麼、哇、哪、啊」はほとんど長音「ー」を使わず、「ニ、ヤ、バ、ア、マ、ワ、ナ、ア」で表記している⁶⁾。
- ④ 声母zh, ch, sh, rの場合、それらに対応している韻母は、必ず同じ仮名表記を用い、a (ヤー)、e (オー)、ai (ヤイ)、ao (ヤウ)、ou (オウ)、an (ヤヌ)、en (エヌ)、ang (ヤン)、eng (オン)、ong (ヨン)、u (ウー)、ua (ワー)、uo (ラー/オー)、ui (ウイ/ユイ)、uan (ヨワヌ)、uang (ヨワン)となる。
- ⑤ 声母z, cの場合、韻母の仮名表記はa (アー)、ai (アイ)、ao (アウ)、ou (オウ)、an (アヌ)、en (エヌ)、ang (アン)、eng (エン)、ong (オン)、u (ウー)、uo (ラー/オー)、ui (ウイ)、uan (オワヌ)となる。

(3) 仮名表記と北京語における音節の対応性

鄭氏の仮名表記と北京語の音節の対応性を分析する為、仮名表記と北京語の音節の対照表を作成した。対照表から見ると、鄭氏の仮名表記は総合的に言えば、その正確性が評価できる。しかし、初(チエー)、初(チユー)、出(チウ)等のような同じ音節なのに、異なる表記をしていることから、鄭氏はおそらくその音節の発音に対して統一せず、幾つの近似音を表記した。また、鄭氏の仮名表記は現代漢語と同じく介音i、uは韻母に属している。ところが、略(リ²⁾、泉(チエヌ)、雲(イ²⁾の介音üの音節のみ、撮口音の符号

「 \cdot 」は声母のところに付し、声母に属している。

(4) 両書における特殊な仮名表記について

- ① 『語言合璧』の「這」は「 $\dot{\text{チ}}^{\text{オ}}$ 」、「 $\dot{\text{チ}}^{\text{イ}}$ 」、「 $\dot{\text{チ}}^{\text{エ}}$ 」、「 $\dot{\text{チ}}^{\text{イ}}$ 」の4種類の仮名表記がある。『四語合璧』はこれに「 $\dot{\text{チ}}^{\text{イ}}$ 」を加えた5種類がある。「凡例」の符号についての解説により、「 $\dot{\text{チ}}^{\text{オ}}$ 」の仮名表記は拼音“zhe”と同じ音を表している。「 $\dot{\text{チ}}^{\text{イ}}$ 」は恐らく拼音の“zhei”に相当する。鄭氏は“zhei”の読み方を認識しているものの、その仮名表記については定説がなく、表記が計5種類になってしまったと考えられる。
- ② 鶴（ハウ²）は《中原音韻》に“蕭豪韻入聲作平聲”とあり、擬音hao²は「ハウ²」に近く、白読音である。和（ハイ⁴）は《京味兒夜話》に、“连接词‘和’，在当作‘跟’、‘与’、‘同’等意思讲时，北京人不仅说hài（害），而且也说hàn（汗）、hui（会），都是‘和’的同声之转。”（93頁）と述べている。虹（カン⁴）については《京音字彙》（1913）では“虹虫部蟠蜥也又音洪又俗音楨”（周建設2015、429頁）となり、韁（カン¹）は“韁革部同韁”（428頁）となる。以上の発音は全て北京語の方言音である。
- ③ 両書では「孔雀」という単語が見られ、その「雀」はそれぞれ「 $\dot{\text{チ}}^{\text{ヨ}}$ 」、「 $\dot{\text{チ}}^{\text{ヤウ}}$ 」と注音し、拼音の「qiao³」に相当する。《現代漢語詞典》には、雀（qiao³）は“义同‘雀’（què），用于‘家雀兒’、‘雀盲眼’。”（1100頁）とある。この「孔雀」はkong³que⁴と読むが、kong³qiao³と読むのは古音である。「若」には「 $\dot{\text{ジ}}^{\text{ヨ}}$ 」と「 $\dot{\text{ヤウ}}^{\text{4}}$ 」の2つの表記があり、前者は“ruo”、後者は“yao”の発音となり、“yao”白読音である。

(5) まとめ

以上のことから見ると、『語言合璧』と『四語合璧』の仮名表記は異なる点が存在するが、その音節分布はほぼ同じである。両書の特徴については以下の3点にまとめることができる。

- ① 両書における韻母の仮名表記は著者が独自の規則を採用し、正確さと簡易性を兼ね備えた。
- ② 『語言合璧』は「 $\dot{\text{}}$ 」、「 $\dot{\text{}}^{\text{}}$ 」、「 $\dot{\text{}}^{\text{}}$ 」等の符号を使い、喉頭音、撮口呼、卷舌音等を簡略に表記した。『四語合璧』は『語言合璧』の符号を継承しつつ、歯音の符号「 $\dot{\text{}}$ 」をさらに加えた。両書とも符号の使用に曖昧な箇所はあるが、学習者に正確な北京語を習得させるために、工夫された面もあることが見て取れる。
- ③ 両書の仮名表記から見ると、それらの発音は現代北京語とほぼ同じである。また本文に白読音、北京語の方言音まで徹底して表記したことから、鄭氏は北京語の知識が豊かであると言えよう。

5. 『北京發音反切表』の仮名表記

『反切表』は鄭永邦が編纂し、明治37年（1904年）に文求堂から出版された。この表は明治時代に日本人が編纂した反切注音、ローマ字表記、仮名表記を用いた初めての北京語音韻対照表である。『反切表』に関する詳細な分析は別稿に譲るため、本稿では声母韻母について仮名表記のみを取り上げる。

『反切表』には53個の声母がある。現代漢語より声母数が多い理由は、韻母の介音“i”、“u”、“ü”は声母と組み合わせ“声介合母”が設定されているからである。実際のところ現代漢語と同じくゼロ声母を含めると22個の声母があり、その仮名表記はb（ポー、ピー）、p（ポ一、ピ一）、m（モー、ミー）、f（フ）、d（ト一、チ一、ツ一）、t（ト一、チ一、ツ一）、n（ノ一、ニー、ヌ一）、l（ロー、リー、ルー）、g（コー、クー）、k（コ一、ク一）、h（ホ一、ホ）、j（チ一、チュ）、q（チ一、チュ）、x（シー、シ一、シユ）、z（ツ一、ツウ）、c（ツ一、ツウ）、s（スウ、ス一）、zh（チ一、チュ）、ch（チ一、チュ）、sh（シ一、シユ）、r（ジ、ジュ）、y（イー、イユ）、w（ウ）となる。『反切表』の韻母は18個あり、対応している仮名表記はa（ア）、ai（ア）、an（ア）、ang（ア）、ao（ア）、e（オ）、ei（エ）、en（エ）、eng（エ）、i（イ）、ie（イエ）、ian（イエ）、in（イ）、ing（イ）、o（オ）、ou（オ）、ü（イユ）、u（ウ）となる。「ian」以外の複母音韻母は“声介合母”と綴って、その音を形成する。鼻音韻尾は、-nと「ヌ（nu）」の[n]、-ngと「アン（an）」の[n]に発音の類似性があるため、「前鼻音n」を「ヌ」で表し、「後鼻音

ng」は「ン」で表している。有気音は仮名表記の上に「一」をつけて表している。声母、韻母、有気音、卷舌音等の表記から、『反切表』は主に『語言合璧』を参考にしたことがわかる。

6. 明治末期における鄭永邦著書の仮名表記

(1) 明治時代における仮名表記の北京官話教科書

筆者は六角恒広 (1991-1998)、李無未 (2015)、張美蘭 (2011) を参照し、明治時代の44年間に出版された全84種類である。仮名表記のある北京語の教科書や辞典の一覧表を作成した。一覧表から見ると、『言語集』は初めて現れた仮名表記の北京語教科書である。広部精は「緒言」に「敬宇先生カラ在清國ノ英公使ウエード氏ノ語言自邇集ヲ贈ラレマシタ」と記している。その時の広部精が学んだ中国語は南京語であり、『語言自邇集』(1867年 以下は『自邇集』と略称)の北京語とは異なっていた。そこで、薛乃良に師事し北京語を学び始めた。六角恒広 (1998) によると、広部精は南京語から北京語に切り替える時の大きな問題は「主として音の面にある」(19頁)と認識している。そのために、広部精は日本人向けの純粋な北京音を学習できる教科書として『自邇集』を改編し、仮名表記をつけたのであろう。

明治時代の北京語教科書の音声表記は主にローマ字表記、仮名表記、及び仮名表記とローマ字表記併用の3種類がある。初めてローマ字表記を採用した北京語教科書は『自邇集』で、その後日本で出版されたローマ字表記の北京語教科書はおよそ12種類ある。また、一覧表の84種類の教科書と辞典の中では、最初に仮名表記のみを採用した教科書は『独案内』であり、その後、同類型のものが計68種類出版された。仮名表記とローマ字表記併用の教科書はわずか15種類である。以上のことから、明治時代では北京語教科書において仮名表記形式が一般的だったと言えよう。また、鄭氏が著した3種類の教科書の中では『語言合璧』と『四語合璧』は共に仮名表記とローマ字表記併用であった。『反切表』は明治時代において仮名表記、ローマ字表記、反切注音の3種類の表記形式を有する唯一の資料であり、音声表記の集大成である。

(2) 鄭永邦仮名表記の変遷

明治時代において鄭氏の仮名表記の位置付けを明らかにする為に、『語言合璧』が出版されるまでの仮名表記を有する教科書を全て整理した⁸⁾。それらと鄭氏の仮名表記を比較し、仮名表記がどのような変遷を辿ったのかを考察する為に、以下の表を作成した。

表3 明治時代北京語教科書仮名表記変遷表⁹⁾

書名 表音変化	『言語集』 (1880)	『独案内』 (1885)	『自在』 (1885)	『語言合璧』 (1888)	『反切表』 (1904)	『四語合璧』 (1910)
表記方法	カタカナ	カタカナ	ひらかな	カタカナ	カタカナ	カタカナ
表記種類	ローマ字 仮名表記	仮名表記	仮名表記	ローマ字 仮名表記	ローマ字 仮名表記 反切表記	ローマ字 仮名表記
声調	○	×	×	○	×	○
ウェード式	○	×	×	○	○	○
卷舌音	×	×	×	○直 ㄗー	○知 ㄗー	○紙 ㄗー
撮口呼ü	△#	△#	×	符号 ..	×	符号 ..
有気音	×	×	×	△彩 ツ ^ア イ	○疵 ツー	△菜 ツ ^ア イ
アル化	×	×	×	○那兒ナ ^ル	△兒エ ^ル	○點兒チ ^エ ル
鼻音韻尾	-nン -ngンヌ	-nン -ngン	△-nん △-ngん	-nヌ -ngン	-nヌ -ngン	-nヌ -ngン

表3を見ると、『自在』以外の教科書は『言語集』を参照したことが分った。しかし、『自在』は声母にしても、韻母にしても、ほかの5種類の教科書とは違い、多くの仮名表記は『言語集』を参考にしたとは

考えにくく、独自の表記体系を有する。まずは意大利（いたり）／Italy（イタリ）、比利时（べるじゅむ）／Belgium（ベルジウム）等のような国名に対する仮名表記はほぼ英語の発音により記した。また、腎（ちいーん）、肩（けーん）、飯（はん）等のような一部の語彙の仮名表記は日本語の音読みにより表記した。それに、營（とわん）、閃（めん）、餌（しー）等のような一部の仮名表記は理解が困難である。

『言語集』、『独案内』と鄭氏の仮名表記の関係は以下の通りである。

- ① 声母についてx、r以外は『言語集』、『独案内』と鄭氏の仮名表記は全く同じ仮名で表記している。それらに対応している仮名は声母bとpはハ行の濁音、半濁音を使い、dとtはタ行、gとkはカ行、mはマ行、nはナ行、lはラ行、hはハ行の仮名を用いる。j、q、zh、chはともに仮名「チ」を、shは「シ」、fは「フ」を利用している。
- ② 韻母e、ao、ie、iao、iu、ou、er、u、ua、uo、iong以外は5種類の教科書は全て共通した仮名表記を用いた。『反切表』は音声表である為、他の教科書とやや異なる。
- ③ 表3の符号#は『言語集』と『独案内』にのみ用いている。『言語集』において符号#は句（チュ#）、取（チュ#）、須（シュ#）のような韻母üの場合のみ付している。『独案内』は禧（シ#）、拜（バ#）北（ペ#）、回（ホ#）、壞（ホワ#）、去（チュ#）のような韻母i、ai、ei、ui、uai、üの場合に用いている。鄭氏の仮名表記はローマ字表記の符号「 \cdot 」を用い、撮口呼üのことを表す。
- ④ 卷舌音、有気音、アル化について鄭氏は十分に認識して表記していたと言える。中国語の前鼻音韻尾について鄭氏は明確に-nを「ヌ」、後鼻音韻尾-ngを「ン」に対応させている。『反切表』の「發音心得」により、-nと「ヌ（nu）」の[n]、-ngと「アン（an）」の[n]に発音の類似性があるという理由を述べ、明確に区分している。

7. 鄭永邦著書における仮名表記の北京語音声教育史上の価値

以上、本稿は明治時代に仮名表記のある北京語教科書の整理、分析を通して言えることは、鄭氏の仮名表記は日本の北京語音声教育史上の価値については以下の3点にまとめることができる。

- ① 鄭氏は長年北京駐在の外交官だったため、北京語の音声に対する深い認識の持ち主、ウェード氏の『自邇集』（1867）、広部精の『言語集』（1880）の2書を参照した上で、当時の北京語音声と自身の考察したものをベースとしながら、声母韻母の仮名表記に対する独創の規則を採用し、正確さと簡易性を兼ね備えた。
- ② 鄭氏の三書は有気音、卷舌音、撮口呼、齒茎音等の中国語の特殊な発音に対する仮名、ローマ字表記以外に符号「 \cdot 」、「 \circ 」、「 \sim 」、「 \wedge 」、「 \neg 」を考案、明治末期の日本人が北京語の音声認識と発音理解に大いに役立つものとなる。
- ③ 明治時代では北京語教科書の表記形式は主に仮名表記である。鄭氏の三書には仮名表記を言うまでもなく、ローマ字表記、反切注音も採用している。そして、『反切表』は明治時代末期の日本における北京語音声研究の代表的な音節対照表として高く評価できる。

注

- 1) 鄭永邦は日本人として初めて北京語教科書である『官話指南』を編纂した著者の一人であり、また、北京で長年駐在した経験があり、北京語の音声に対する深い認識の持ち主である。そのために、『語言合璧』の編纂は鄭氏が主導したと考えられ、本稿では「鄭氏の仮名表記」と称する。
- 2) 劉慶汾の序により、鄭永邦と呉大五郎が鄭固旆、呉希静とも呼ばれていたことを述べた。鄭氏と呉氏は長年北京駐在の外交官として、中国人と付き合う際、中国人のように「固旆」、「希静」という漢字名を使用したであろう。
- 3) 具体的には『語言合璧』における「顔色、鸚哥、學房、城府、火車頭、賣玉器的、荳餅、拏、狼公道、收條、犯禁、上等車、中等車、多偌」など語彙は『四語合璧』がそれぞれ「顔料、鸚哥兒、學堂、城

鎮、火車站、賣珠寶的、油滓、拿、很公道、掛號、絕版、頭等車、二等車、多嚙」に改め、短文「我還沒喝過這麼好的。」「天很冷，妳進來罷。」が「我還沒喝過這麼好的酒哪。」「天很冷，妳可以進去罷。」に変更し、また「您總沒喝過酒啊。」との一文が追加した。

- 4) 「撮口音」は現代漢語拼音の「撮口呼」である。
- 5) 符号「'」、「ˊ」、「ˋ」の誤用、「給（ケイ）、繞（シヤウ）、嗽（ソウ）、走（ツォウ）、霜（シヨワン）、梁（ニヤン）」などの誤表記である。
- 6) 「啊、呢、哪」は一部「アー、ニー、ナー」と長音で表記することもある。
- 7) 本文には「チー」の上に「ˊ」をつけて、「ch」の仮名表記をしているが、入力の制限で「チー」で表記した。
- 8) 両書の仮名表記はほぼ同じであるため、『語言合璧』以前に出版された教科書のみを取り上げた。
- 9) ○は「ある」という意味を表し、×は「なし」という意味を表し、△は「あるが、やや問題ある」としている。

言語資料

『亜細亞言語集支那官話部』	1880年	広部精	発行者 青山清吉
『英清会話独案内』	1885年	田中正程	発行者 昇栄堂
『英和支那語学自在』	1885年	川崎華	発行者 川崎華
『日漢英語言合璧』	1888年	鄭永邦、呉大五郎	発行者 鄭永慶
『北京發音反切表』	1904年	鄭永邦	発行者 田中慶太郎
『日清英露四語合璧』	1910年	鄭永邦、呉大五郎	発行者 島田太四郎

参考文献

日本語

1. 六角恒広（1991-1998）『中国語教本類集成』（全10集）不二出版
2. ———（1994）『中国語書誌』不二出版
3. ———（1998）『中国語学習余聞』同学社
4. 王雪（2017）「明治・大正期における日本人のr化音の学習」『東アジア研究』15 山口大学大学院東アジア研究科

中国語

1. (元) 周德清輯《中原音韻》芸文印書館（1997）影印本
2. 王璞（1913）《京音字彙》周建設主編（2015）《明、清、民国时期珍稀老北京话历史文献整理与研究》首都師範大學出版社
3. 羅竹風主編（1986-1994）《漢語大詞典》第12卷 漢語大詞典出版社
4. 彌松頤（1999）《京味兒夜話》人民文學出版社
5. 中國社會科學院語言研究所詞典編輯室（2005）《現代漢語詞典》（第5版）商務印書館
6. 吳非（2007）《<日漢英語言合璧>語音教學研究》吉林大學 碩士論文
7. 張美蘭（2011）《日本明治時期漢語教科書彙刊》廣西師範大學出版社
8. 林曉京（2014）《<日清英露四語合璧>的漢語語音詞彙研究》廈門大學 碩士論文
9. 李無未（2015）《日本明治教科書匯刊》（江戸明治編）中華書局